

忠雄さんの話 第二話

十代半ばにして実家を離れ、単身、東京は大森の軍需工場に勤めた忠雄。午前
は外で竹槍訓練、午後は工場内での労働に汗を流す、そんな毎日だった。

ある日曜日。仕事は休みだが、これと言ってやることもない。ふいに、蜜柑
が食べたいと思った。おなか一杯、蜜柑が食べたいと。そこで、小遣い程度のお
金を手に、小田原まで出かけることにした。

とはいえ小田原には、行ったことがなかった。着いてはみたものの、さて、ど
こに行けば蜜柑が買えるのか、皆目見当がつかない。あちらか、いやこちらか
と、さまよっているうちに、腹はどんどん減ってくる。途方に暮れかけた頃、偶
然通りかかった寺の敷地に、蜜柑の木を見つけた。早速訪ねてその実を分けても
らい、寺の庭でかぶりついた。うまかった。「まあ、あんまりいい蜜柑じゃな
かったんだけどね」と忠雄は笑う。「自家用だから、黒っぽくてね。だけど
も、うまかったわ」

売り物ではないにせよ、やはりタダというわけにもゆくまいと、お金を手に挨拶

拶をしに行った忠雄だが、応対した僧侶は、おそらく忠雄の食べっぷりを見ていたのだろう、「お金はいらなから、カバンに入るだけ持っていきなさい」と言ってくれた。これは本当に、うれしかった。

* * *

その頃、東京の空には、繰り返してB 29が来襲していた。東京での生活と「B 29」とは、忠雄の記憶の中では切っても切れない関係らしく、何度もその言葉が口にもよる。忠雄は終戦を前に、一度、帰省したことがあるのだが、そのときにも、B 29の機影はつきまとっていた。列車は山の中に入るたびに停車し、B 29が飛び去るのを待ってから走り出す、その繰り返しだった。

この戦争がまもなく、「敗戦」という形で終止符を打つことは、もちろん、忠雄には知る由もなかった。しかし、列車を乗り継いでたどり着いた青森の風景は、かつて忠雄が東京に向かったときのそれとは、まるで違っていた。

「丸焼き」

忠雄は遠い目で、そうつぶやいた。

「牛も、馬も、人も、みんな真っ黒になって、死んでたんだわ」

僕は思わず、言葉を失った。死屍累々とか、地獄絵図とか、そんな言葉を軽々しく使うことが憚られるような現実。それをこの人は、十代半ばにして、確かに見た。僕はそれを、見ていない。まだ、だろうか。それとも、この先も、見ることはないのだろうか。

* * *

「そしたら、憲兵に声かけられて」

その言葉に、さらにどきつとした僕だが、憲兵が忠雄に命じたのは、消火を手伝え、とのことであつたらしい。そう言われて向かつた現場は、缶詰工場。何とか無事に消火を終えた後、お礼ということ、缶詰をたくさんもらつた。五十個ほどはあつたと言う。その中身は、「今考えれば、サバ。あとイワシかな」今考えれば、というの、缶詰のラベルがどれも焦げていて、見分けがつかなくなつたからだ。それにしても、缶詰というのは良いものだ、このとき忠雄はつくづく思つた。

「うわっかわは焼けてしまつても、中身は何でもないからね。モノのないときに、それはいいお土産さ」

* * *

青森を後にして、函館に向かった忠雄。津軽海峡を渡らねばならないわけだが、これも東京に向かったときとは勝手が違った。連絡船がすべて、沈んでいたのだ。代わりに使われていたのは、通常は石炭を運ぶために使われる船だった。それに忠雄も乗ったわけだが、船は小さく、揺れ方は尋常ではなかった。おまけに体を支える手すりもない。船に乗り合わせた人の多くは、持てるかぎりの荷物を手に、北国へ疎開する人たちだった。夜半に函館の港についた頃には、乗客はみな、憔悴しきっていた。

比較的身軽だった忠雄は、大荷物を抱えた老人に手を貸しながら、港に降り立った。その目に映ったのは、青森と同じように、火の海と化した函館の姿だった。

(続)

追記……このお話の主人公で、語り手でもある高橋忠雄さんが、去る五月一日に、この世を去りました。豪快なエピソードをいくつも持つものの、本人の語り口はシャイで控えめ。魅力的な人でした。もっとももっと、話を聞きたかったのですが、それもおはかないません。お聞きしたかぎりのお話については、今後もこの紙面で紹介させていただきます。ご冥福をお祈りいたします。

(堀雅彦)